
約束をしよう

離宮 愛琉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

約束をしよう

【Nコード】

N5779N

【作者名】

離宮 愛琉

【あらすじ】

もしもはぐれたらその時はちゃんと探してよ。

最期の時が来てもちゃんと笑ってて。

一人さみしいときは——早く私の事は忘れて生きてゆけばいい。

そう、約束をしよう。

supercell『約束をしよう』を小説化しました。

窓の外を見てため息を吐く。

桜が咲いている陽だまりの中、制服を着た何人もの生徒が笑いながら、泣きながら通り過ぎてゆく。

…そうか、卒業式だったんだ。

ふ、と微笑み、羨ましいと思うと同時に涙が溢れた。

…私は、卒業できないままだな……

途端に、部屋のドアを叩く音が耳に届いた。

慌てて涙を拭き、どうぞ、と言う。

ドアが開き、いつもみたいに制服姿の君が入ってくる。

「今日も来てくれたんだ。」

にこやかに言つて、自分が横になっているベッドの端を叩く。

それに気付いた君は呆れたように笑いながら、私が叩いた場所に座つてくれる。

「毎日来るって、約束しただろ？」

そう言つて、私の頭を撫でる君の手が大きくて、温かくて、また泣きそうになってしまう。

それがバレないように少し俯いてみたけど、すぐにバレたかな？

撫でる手を止めて、君は私の顔を覗き込んだ。

「どうした？」

心配そうに言う君が可笑しくて、愛しくて、笑みがこぼれた。

「うつん。ちよつと、やだなあ……って。」

そう言つた私はちゃんと笑つてたはずなのに、悲しげな顔して君は私の隣に寝っ転がる。

「…今日、卒業式だった。」

そうして落ち着いた君の声が部屋に響く。

「うん。窓から見てたらなんとなく分かった。」

私も、天井を見たまま答える。

ちよつとだけ、静まり返る部屋。

春先の空気が風と一緒に入ってきて、少しだけ髪を揺らした。

「制服のさ、ボタン、後輩たちに取られちゃってさ。」

ちよつと苦笑い気味に言う君の表情は見えなかったけど、きっと、いい卒業式だったんだろうって思った。

「でもさ、いつも前開いてるから、ボタン要らないじゃん?」

私も苦笑い気味に返す。

「モテモテで良かったね?」

くすくすと笑いながら、目を細めて君を見る。

君はいつもからかうと顔が赤くなるから、つい可愛くていじめたくなってしまう。

「お前なあ…」

そう言つて、思った通り顔を赤くして私の頭を撫でてくれる。

やっぱり私、君の事…好き、なんだな。

嬉しくて、切なくて、また涙が溢れそうになってしまう。

…あと、どれくらい、こうして君といられるんだろう…って。

考えるだけ無駄なのに、ついつい考えてしまう。

やっぱり、嫌だよ。

そんな私の様子に気づいたのか、君は自分の制服からハンカチを出して、私に渡してくれた。

…ちよつと、濡れてる。

「ねえ、卒業式、泣いたんでしょ?」

そう、布団で顔を隠しながら言つと、私が泣いてるのを見ないように体を起して座り、君は照れたように言う。

「まあ…ちよつと。」

「なあにそれーっ、男泣きー!」

目を借りたハンカチで押えながらまた君をからかう。

「おま…自分だって！」

そう言っつて小突かれた。

そんなやりとりが嬉しくて、小さく笑い声をあげた。

「…皆、卒業したんだね…」

ちよつと間を置いて、しんみりと言うと、君が突然立ち上がった

「お前もな。」

そう言っつて、バックをあさり始めた。

「…なに探してるの？」

「これ。」

そう言っつて、君が取りだしたのは、卒業証書。

「卒業証書、授与！」

手渡されたそれには、私の名前が書かれていた。

「…これ…」

「せんせーから預かってきた。どうせなら俺から渡したかったし。」

そう言っつて得意げに君は笑った。

「…卒業式には、出れなかったけど。」

「ま、そのせいで俺が男泣きしたんだから、そうがっかりすんな？」

一瞬、意味が分からなかったけど、それが君の精一杯、私を元気付

けようと言っつてくれたんだって事に気づいて、思わず「馬鹿…」っ

て呟いてしまった。

…君には聞こえなかったみたいだけど。

「あ、そうそう。」

そう言っつて君はまたポケットを探り始めた。

「これ、よかったら貰っつて欲しいんだ。」

そっつて私の手を取っつて、握らせたのは制服のボタンだった。

「…ボタン？」

「第二だけは、お前に貰っつてほしくてさ、あらかじめ取っつておいたんだ。一週間も前から。したらさ、先生が『卒業式にボタンなしなんて恥ずかしいだろ』って怒り始めちゃっつてさ。しょうがないだろ

つてのー。」

そう言う君を横目に私も起き上がる。

そんな私に気づいて、慌てて支えてくれる。

「起き上がって大丈夫か？」

「…き…」

「……え？」

「…好き、」

その瞬間、抱きしめられ、私は何かが壊れたように何度も何度も泣きながら呟く。

「…好き。大好きなの…好き…」

「うん…うん…」

不器用な君は「うん」しか言ってくれなかったけど、それが君の優しいとこだって知ってたから、想いだけが溢れて、どうしようもなくなってしまった。

…やっぱり、バカだよ…。

どうせ、もうすぐ別れてしまふんだから

君の事、好きになってもしょうがないって

ずっとずっと分かってたのに…

だから、何も言わないまま

学校からいなくなるうって

そう、思ってたのに。

何で、君は……

「何で、私なんか…好きになってくれたの？…もうすぐ

もうすぐ本当に居なくなっちゃうって、知ってたはずなのに…なんでよ…」

泣きながら言った言葉は、虚しく部屋に響いた。

「そんなの、わかんねえよ…。」

その一言はぶっきらぼうだけど、すごく、温かくて。

確かめるように抱きしめあって

キスをした 何度も

夜が明けるまで

伝える言葉も知らないまま

ただ君といたい

そう思ってたんだよ

…ねえ、運命って何でこんなに残酷なのかな？

実らないってずっと思ってた恋がやっと叶ったって思った途端
すぐに終わってしまうんだって、気付かされた。

…ねえ、何でかな わかんないよ

でも、君が笑ってくれるから

私は幸せだったんだ。

…ありがとう。

重なる唇 途切れないように

もつと強く抱きしめて

壊れそうなくらい

伝える言葉も知らないまま

ただ君といたい

そう願ってたんだよ

…でもね、もうそろそろ

別れなきゃいけない日が来るって、知ってるから

君には、いつまでも笑って欲しいって、そう思うから

約束をしよう

「…ねえ、」

いつの間にか夜が明けていた部屋にはうつすらと朝日が差し込んでいた。

君は抱きしめる腕を緩めて、私の顔を見る。

その、泣き腫らした君の顔を見て、私は自然に笑う事ができた。

「最期の時が来ても、泣かないでちゃんと笑ってて？ 悲しいのは嫌だから…そうでしょ？」

…だって、愛してるから。

「あと、もう一つ。」

最後の、約束。

「一人、寂しい時は…その時は怒らないから、早く私の事は忘れて生きてゆけばいい…」

…そう約束をしよう。

視界がぼやける。

ああ、最後に、最期の約束をしていて良かった…。

…愛してる。

だから、君は幸せになって。

…約束、だからね？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5779n/>

約束をしよう

2010年10月8日13時43分発行